

夢想の人生

内 田 武 彦

子供のころ、ターザンを夢みた。むろんE.バローズの貴族的ターザンではない。だいたい6、7歳の少年が、あの原作など知るわけがない。知ったのは、大学の英文科へ入ってからである。夢中になったのは、J.ワイズミラーのジャングル・ターザンだった。母にせがんで赤い布地の六尺フンドシを作ってもらい、下半身部のマテバ椎の実ほどのモノを締め隠して粋がった。子供の用具である。四尺フンドシ、というていどの布きれであったのか？

あとはターザンと同じである。子供の目には魔力的なほどに繁茂する裏山へ走り込み、木から木、枝から枝へと伝いながらアワワワアーと叫んで遊びまわった。ボーイ・ソプラノのターザンだったね、と後になって隣家のオバアチャにからかわれた。バナナの木はないか、と毎日探した。なかった。でも、春は口のなかが真っ赤かになるようなサクランボが実り、秋は紫のアケビやミニミニナッツが体を寄せ合うように熟す椎の実があった。そして野生のミョウガ、ヤマブドウ、ヘビイチゴなど。腹ごしらえは、それだけで充分だった。鼻をつく白い花も食べた。クチナシだったのだろうか。蚊、クモ、蛇、ヤンマ、百舌、ヤマバト、みんな友達だった。いや、現在までずっと変ることのない親友達である。

ある日、楠の巨木のテッペンが折れた。墜落した。気を失った。梢から地面までの数秒間のグルグルグルグルグルッとした彩りは、いまままぶたに明確に刻みつけられている。漱石先生は屋根から飛び降りた少年を不朽の文学作品に仕立て上げたが、私のターザン生活はこの日の病院送りで終了となった。(漱石の話はしないほうがいいね。あのひとの文学について論議をすると、とたんに会話がシラけてストップする。まじめに語っていた偉才江藤淳さんでさえ、沈黙の時を迎えなければならなかった。)

小学校の高学年では、モンテクリスト伯だった。戦時だった。「オイ、これ、敵の国の

物語だ。ケイサツにメッカッタラ、オレが牢屋行きになっかも知んねえから秘密にしるよ。」と、兄が海軍へ行く前日にそっとプレゼントしてくれた本だった。表紙のページが黒ずんでいた。かなり厚手に感じた。夜は灯火が制限されていたので、昼、冬の名ごりの寒風を避けて日だまりの縁側の端っこで読みふけた。難解な文章だった。しかし2、30ページほど読み進むうちに、理解可能となってきた。そしてあとは、大復讐伯爵に夢中になるだけだった。

ピラ、コブタ、マスサン、イカチ、マーチャン。はるかなガキ仲間だ。私はドククラ（ゲ）だった。彼らに本の入手経緯は黙っていたが、読んだその日の復讐譚を詳しく話した。目的は周囲のヤツらを、みんなの夢のなかで退治することだったのだ。意味なんかない。そして実行した。ビンタ好きの鬼教師ノブチンを殺し、少年性器癖の石屋のジジイを殺し、金歯ムキだしのイチャモン好きカバババアを殺し、敵対する坂下のチンピラどもを殺した。近くの遊郭街のオネエさんたちも、毎日ひとりずつ殺した。愛をこめて。そしてさいごはいつも、悟空（西遊記）の唄を合唱してフィナーレとした。「オレ達ハー、世界ジュウデー、一番ツヨインダゾー。ホイホイ。」

でもひとりだけ一ヶ月ほどの瞬間的期間だったが、年下の都会少女が加わっていた。真偽不明だが、銀行員の娘だということになっていた。全員がこの娘に惚れた。「疎開の子チャン」と、猫ナゲ声で少年たちは呼んでいた。でも本名を知っていたのは、たぶん私だけだった。セツないほどの想いがつのと草っ原で仰むけになって、ケイコチャンと青い天空へつぶやいた。

そしてほどなく、その初恋の空から爆弾が落ちた。街は無形となった。たくさんの人たちが死んだ。コブタは焼死し、マーチャンは不明となった。ほかのみんなも、消息が失せた。ガキ仲間の共同夢想殺人体も、永久に失せた。

敗戦の日が来た。大人どもは「自由への開放」とか「封建制から民主社会へ」などと、浮かれた呪文を唱え散らした。昨日まで「天皇サマのために死ぬ」とワメいていたヤツどもがである。子供ごろにも呆れきったがダブル・スタンダードの狡猾性を覚知したのは、人生でこのときがおそらく初めてであつたろう。（教授会のアイツやアイツの顔が浮ぶ。）ところで社会はなんとなく明るい方向に進んでいたにもかかわらず、私は陰鬱きわまりなかった。仲間が四散した。語る相手もいなかった。ひとりぼっちとなっていた。多数の人間を殺したあとで、神も仏も沈黙していた。そして年の暮れにそのことは起った。

なぜだったのかは分からない。真夜中、首に手ぬぐいを巻いて犬吠埼へ向った。13歳だった。冬の風が戦後のボロ着をつらぬいて、素肌に突きささった。断崖に座って沖を見つめると、まっくら闇に波だけが光っていた。たぶん自殺したかったのだ。感覚がなくなるほど、見つめに見つめていた。凍えた。異常にふるえた。そしてふしぎなできごとだっ

た。くろぐろとした、海溟の底が見えてきたのだ。巨大な海藻の林がゆらりとゆれて、そのあいだを銀色に発光する深海魚が一匹だけ仲間もなく、くねりながらしかもものすごいスピードで泳ぎ遊んでいた。呼びかけた。オーイ、と。魚はふり返った。眸をまっすぐに向けてきた。きれいな、ほんとうにきれいな眸だった。それから暗い林へと泳ぎ去って消えた。あとのことは、まったく憶えていない。きっとサイコロジストだったら、舌もなめらかにこのできごとについて妙説を述べてくださるだろう。E. Underhillの名著 *Mysticism* にも、怪体の魔物と Norwich の Julian の出会いの場面の分析を行なっている一章がある。でも私には、興味の無い分析ということになる。犬吠埼の魚は神の贈り物にちがいない、と信じたからである。その光景をくり返し思い浮べることはまた、無上の快楽となり救いとなった。

翌日からは、陰鬱の気は吹きとんでいた。私の人生は魚へと変転した。明るい無軌道なローティーン生活へと、身をくねらせながら泳ぎ入ることになった。某国野郎の無差別空爆趣味で破壊された少年期の夢世界を、この日から超えて、したたかに生長する時間へと踏み出すことにしたのだ。迷いはなかった。

ハイティーン以降に触れたいのだが、ここでスペースが尽きてしまった。大学ノ論文集ナノデスヨ、コレハ。デスカラ類型的デアットシテモ、青春夢想生活ヲ述ベナケレバナラナイノデス、とは感じている。でも、若くて愚かしかったころを正当化し、理を付加して語るのは恥ずかしい。これは老者の類型的加齢現象そのものである。やはり避けたい。要するに基本的には新宿カブキ町を、ヘドロの沼と定めていた青春であったのだ。退廃と暴力とセックスに規範を求めていた。もう一度書くが、類型的な青春生活であった。二丁目のホモ売り兄ちゃん集団から、理由もなくとつぜん殺されそこなったり、深夜のアベック・カフェのふつくらとしたクッションに、遠い父や母との幸福だった温かい時間を求めた。また泣いたあと熱烈に——コレ、陳腐ナ表現ダネー——いや決死的に愛した恋人と、ヨアケのコーヒーを飲んで別れたものだった。そして部屋へ戻ると詩ばかり読んだ。嫌ミッポイね。青春の類型的形態だった。

愛知大学に運よく勤務できるようになったのは、1961年である。20代の終りだった。ほんとうに運よく、である。そして愛知大学からは、また運よくも夢のような40余年を与えていただいた。感謝するばかりである。またここ数年間私はイギリスの幽霊を夢想的に追いかけまわしており、ありがたいことに丸善書店や同朋社のご厚意で楽しく刊行や発表をさせていただいている。そしてこれも愛知大学というやさしくも強く抱いてくださる場があるので、日常を憂うこともなく超常オバケを追いかけまわしていただけるのだと思っている。重ねて感謝である。

まもなく3月末のその日が来る。そしたらすぐさま深夜の犬吠埼へ行きたい。逢いたいのだ。できたら、寒流の波高い沖へと泳いでゆく。沖の闇のなかで「魚と愛大アリガトー」と、ひと声叫ぶ。これは人生最大のキザ行為となる。イイネエ。魚に逢えなかったら磯へと戻って、朝の早い港町のどこかの店で温まって、ヨアケのこーひーを飲むのだ。それから71歳の夢想人生へと、さらに踏み込む。